
樹海へ行こう

トリカブト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

樹海へ行こう

【Nコード】

N8096F

【作者名】

トリカブト

【あらすじ】

人生に絶望した主人公は樹海を目指すしかしそこへの道のり果てには<http://yamasan3.blog.shinobi.jp/>にて更新中

樹海 1

負け組と呼ばれる僕らは、生きてはいけないのだろうか？

家庭や子供を持ち、将来に希望を持つ権利はないのだろうか？

希望など持たず。

夢など持たず。

世界は平和で明日も明後日も、まじめに生きていれば少しずつ良くなると、信じて来た。

その世界は崩壊していく。

ぎりぎりその日を生きて、使い物にならなければ破棄されてしまう。

日本には最低限の生活を保証する法律があるが、それでもまた口利きや、権力の構図の中で、容易に享受できる者と、受けられない者がいる。

平等なんかない。

汚職しても復帰する政治家。

企業の失策で犠牲者を出しても償うことなく、大金を持ち退職するトップ。

国民の税金で無駄な建物を建て、巨額の損失をだしても平然とし、法外な退職金を手にする官僚達。

金と権力さえあれば、罪は問われない。

そんな力のない者は虫けらと言うのだろうか

空は抜けるように青く、人々は希望に満ちた表情で往来を闊歩する。

都会の朝はそんなものだ。

以前は僕もその群の中の一人であり、それを何の不思議もなく享受していた。

明日はまた繰り返しの平凡な日々とこぼしていたかもしれない。

その平凡こそ今は望むべくもないものになるとは知らずに。明るい光景とは無縁の者達の中の一人となることと思わずに。

ファーストフードと言うのは、この世で貧乏人にはいいシステムである。

100円のコーヒ一杯で長い間居座れるのだ。

100円も惜しいが、居場所のない者にはありがたい。

そんなファーストフードに暗い表情の者達が、壁際の一人席に掛け、ガラスの向こう側に広がる世界をただ眺めている。

男が四人と女が二人、互いにしゃべることもなく、一人掛けの席に掛け、押し黙っているのだ。

店の者にすればこの陰気な集団なのか何か分からない者達に立ち去って欲しいだろうが、彼らにはそんなことは出来ない。

いき場所などないから、今ここにいるのだから。

何故そんな事情が分かるかという、僕がその中の一人だからだ。男や女は年齢や服装もばらばらで、親しげですらない。

何の集まりか、いや集まりであるかさえも余人には分からないだろう。

それもその筈、彼らは今日初めて顔を合わせたのだから。

「樹海へ行こう」と言う自殺志願者の集まるサイトのオフ会なのだ。

「樹海へ行こう」と言うのはその通り、希望を未来に持てず、いつの間にか無価値になった自分の人生にケリをつけたい人々の集まりだ。

最近では集団自殺を防ぐために、こう言うページは警察に監視されていると聞が、ここは管理人が上手いのか、それほど過激でないからなのか、今日ここでオフ会を開くまで持てた。

今日集まったのは主に深夜にやりとりしてるグループで、全員が集まったわけではない。

オフ会即樹海へと行くかもしれない真剣な集まりだからだ。

だからなのか、先ほどから各人の口は重く、ネットでのあの雰囲気

気などない。

初対面と言うこともあるし、人生を終わらせる相談をするのはしにくい。

女性達はぼつぼつと話初めているようだ。

何かを提案しなければと思う反面、あとから来た僕に発言はしにくい。

そしてまた、心に思うことが僕の口を重くしているのだ。

どうしてぼくらは、虫けらのように死ななければならないのかと

樹海2

僕は思うのだ。

どうして僕らは死ぬしかないところまで、追い込まれたのか。

負け組はやりなおすチャンスも無く、生きて行く権利さえないのか？

過去を何度も悔やんだ。

だが取り返しはつかない。

僕は自分のこれまでの半生を思い出した。

もう終わりなんだから一生だろう。

走馬灯のごとくと言うのは本当だ、辛い思いや楽しかった過去が洪水のように蘇りあのころに戻りたいと叫んでしまいそうになる。

僕は親を早くに亡くしたので、叔父の世話になっていたが、申し訳なかったこともあり、高校を出てすぐ就職を決めた。

読書が好きだったことと、高卒の僕でも正社員で働けると言うので、とある書店の正社員になった。

「今日の入荷チェックお願いします」

「レジの釣り銭補充終わりました」

開店前は商品の入荷や、レジの備品補充などやることは山積みだ。立ち読み防止のために、雑誌やまんがをビニールで包まないとならない。

そんなこんなで時間がかかる。

最近はモラルが欠如している客が増え、立ち読みして買わないならまだしも、本を破ったり汚したり、本の上に平然と濡れた傘を置く者もいる。

たくさんあるのでたいしたことはないと思っているのだろうが、一冊ごとに値段のある商品なのだ。

金も払わず汚すことは許されない他人の所有物なのだが、そんなことさえ分からないのに、客だといいつのる。

また万引きも増えた。

古書店が拡大路線を引き、増加したため、そこに売るため、万引きするのだ。

それらに対処する置き位置も考えないとならない。

あつと言う間に開店時間になり、あわただしい一日が始まる。

雑誌の付録つけやらで。まだ準備のできていないものを優先し、在庫確認や棚整理などしたあと、発注などの業務をし、レジの応援など細々とした作業で一日を終わる。

重要なのは発注で新刊がいくら売れるか、目玉となるものは何冊売れるかが問題だ多すぎる過剰在庫になるし、少ないと売りの逃してしまう。

かといって本の問屋や本部が希望どうりに配本してくれるとは限らない。

過去の実績や話題性、立地や客層も配慮し仕入れする。

本社の指示もあるが、こっちの意向が当たった時はとても嬉しい。

書店の仕事は、僕にとって最高に楽しい仕事だった。

「お疲れ様。今日の歓迎会はいつもの所で、先に行ってるよ」

閉店後の雑用をこなしている僕に店長が声を掛けてきた。

樹海3

今日は新入社員の歓迎会だ。

店長は今、五十代であと少しで定年だ。

この会社には創業当時からいるからだろう、

この会社に対して並々ならない愛着を感じているようだ。

本のことには博識で、新人の教育にも手を抜かずに真剣に、

本屋の魅力を教えていきたいと常に言っている。

性格も温厚なので、社員や出版社の人間からも慕われていた。

僕もこの店長の下で働けて良かったと思っている。

僕が歓迎会をやる店に着くと、すでに注文が出され飲み物や食べ物
物は

あらかた揃っていた。

「ご苦労様、待ってたよ」

「お待たせしました」

店長にうながされて、僕は早速席についた。

「はじめはビールだが、あとは各自好きなものを頼むように、では
乾杯の音頭は新人の久保田くん」

「えつ、俺ですか」

新人の久保田くんはびっくりしながらも、乾杯の音頭をとった。

「いや、これからが楽しみだね。がんばってくれよ、ベテランも
ちろん期待してるよ。さあ、どんどん食べよう」

新人の久保田くんは有名な大学を出ているが、偉ぶったところの
ない、感じのいい青年だ。

「僕はこの書店が好きで、卒業したらここで働く決めていたん
です」

その言葉を聞くと僕らの心は暖かいもので一杯になった。

僕らも本が好きで、この書店が好きだからその気持ちは良く分か
った。

好きな仕事ができるのは、本当に幸せなことだった。
僕らはこの先に暗い未来がくるなんて思いもせずみんな楽しんでいた。

樹海 4

僕の勤めていた書店は、全国に十数店舗を展開する中堅の有名書店だった。

書店は昔から差益は低いが不況にも強いと言われてきたので、世情不安が僕にまで及ぶとは思ってもよらなかった。

だから定年退職まではがんばらないなどと夢を描いていたのだ。それに、僕の店も会社全般もそれほどの経営悪化は認められなかった。

毎年売り上げを伸ばし、大学出の同期と同じように昇進し、給料も上がり、

会社自体も新入社員を応募していた。

慌ただしい毎日でそれは寝耳に水だった。

「倒産、て、朝からそんな冗談、本当ってそんな」

僕が非番の日にもその悲劇的な出来事は起こった。

休日でのんびりと家の掃除でもしようとしていた僕に、店に入れないと言う電話が、

古くからのパートさんから電話がかかってきたのだ。

最初はただの冗談か彼女の勘違いかと思ったが、店に着いた僕はその現実にあき然とした。

店のシャッターが固くしまり、全てを拒絶するよなその表には、簡素なコピー文で倒産のお知らせが張られていた。

僕はこの事態になっていることなど知らない、何かの間違ひではないのかと何度もその紙を見た。

社員に何も知らせずに倒産などあるのだろうか？

「あ、チーフこられたんですね。本社に連絡しても誰も出られないから、店長が本社の方に」

僕に声をかけてきたのは電話をくれたパートの女性だった。

「こんなの、嘘ですよ、私たち何も聞いてないですよ」

「僕も聞いてないですよ、店には入れないんですか」

「ビルの管理に言っても鍵も貸してもらえないんです」

僕が来たことで気が緩んだのか、彼女は目をハンカチで押さえ泣き出した。

僕は泣くよりもただ頭が真っ白になった。

本社に行っていた店長が戻って来た。

「店長どうですか？」

店長の顔色は真っ青でそれだけでも事態が深刻なことが分かった。

「本社の方も責任者は誰もいなかった。事務の子が呆然としてたよ」

「本社も封鎖ですか？」

「差し押さえを封じるためなんだろうとか、営業の同期が言ってたよ」

店長は疲れきったように言った。

それから僕らは自宅待機することになった。

「他の店舗の店長や、組合の委員と連絡を取ってみるよ」

店長がそう言うので僕らは不安なまま家で待機した。

樹海 5

閉ざされたシャッター。

冷たく倒産のお詫びと書かれた文章。

債権者が押し寄せるのを防いでいるのだろうか、僕らの荷物だつてロッカーにあるのだ。

もどかしい思いでいっぱいだった。

こうして、自分の生涯の仕事がなんの覚悟もないまま、あっけなく失われた。

だが事態はさらに深刻になり、経営者は給料や退職金さえ払う気がないと言うのが分かった。

労働組合や弁護士が駆け回り、一時金が出たが少ない金額だった。オーナー一族は資金を巧く隠し、逃げ回ったらしい。

怒りより情けなくなった。

あれほど愛した会社の経営者は会社も社員も愛してはいなかった。会社のオーナーは社員などどうでもいい存在だったと言うことに深く傷ついた。

生活に余裕があるわけではないので職を捜したが、三十過ぎた男、特別なスキルもない男に世間の風は冷たい。

毎日足を棒にして何件も面接に行ったが、高校出であることや、なんの技術もないことを揶揄され、冷笑された。

正確に数えてはないが、五十社は超えただろう。

疲れはて資金も少ないので、安易だが派遣へと申し込んだ。

派遣での仕事は思う他厳しかった。

派遣会社は初心者でも出来て高給と言うことだったが、即戦力を期待されたが、経験がないので分からないづくめだ。

派遣は即戦力だと宣伝し、会社はそう思い使うと出来が悪い。

このギャップは埋められないものだった。

派遣に高い金を払う会社は完璧を求めてくるし、社員は見下して

冷たい対応をする。

その上、高給と言う話はいろんなものが差し引かれ、たいした額にはならなかった。

だんだんと疲れた僕の生産性は落ち結局は契約を切られた。

僕はラインには向いてないのだ。

樹海6

同時期に入った者はすぐに慣れたようだが、僕は年齢もいってるし、経験もないのでなかなか慣れず。

何をやっても巧くいかずに、ケアレスミスが増えていく。

主任が言う個数目標などまったく無理だった。

嫌みを言われ、派遣の担当が僕には向いてないと契約を切られた。自分でも分かっていたことだが、こんなことも出来ない自分に絶望を感じた。

自分で思っていたよりも僕は出来ない虫けらな人間なのだ。

絶望を感じ、その夜は泣き明かした。

「元気が今度飲みに行かないか？」

そんな時本屋時代の同期から電話をもらったので、たまには気晴らしもいいかと思いい、飲みに行った。

「久しぶりだな、どうしている」

同じ年に同期で入った松田は同期と言っても、国立の大学出で研修期間が終わったあと、本社採用になった。

そのあと本社窓口業務となったので、接触があり、たびたび飲みに行った。

「あの時は大変だったな、もう俺は人生終わりかと思ったよ」

「僕もだよ、今はどうしてるんだ」

「今は趣味でやってたインターネットの趣味仲間に使われて、コンテツの会社に就職したんだけど、なんだかあれよあってうちに、まあ食べれる企業になってさ、助かってるよ。おまえは？」

名前を聞くと今躍進中の有名企業だった。

「すごいな、、僕は派遣で、やっと食ってる」

やはり国立の大学出は高校とは違うのだ。

僕は惨めな思いを隠しきれずそう言っていた。

「そんなことないぜ、俺だってここで一生やっていける確信はない

からな」

「だけど、大手じゃないか」

「世界は変動してるよ、大手の会社だっていつ潰れるか、安全なのは公務員くらいじゃないかな」

樹海7

松田はため息をついた。

「以前のように安定していない。あつと言う間に企業が育ち潰れていくんだ。大手の企業といっても安心できないよ」

なるほどと思った。

毎日のように中小企業が倒産し、大企業が合併再編している。

絶対に安心な明日はないのだ。

「だから少しでも増やすために資産投資をしているんだ」

「投資？」

「株や先物とかを少し…」

松田の話は驚くべきものだった。

それと共に自分は何も知らないのだと実感した。

松田はインターネットで、株式投資と先物とあとは不動産をやっているし、将来ののために、保険も入っている。

子供は親に預け奥さんも働いて、目標金額をためているということだ。

「老後のことを考えると、厚生年金なんか夫婦で三十万あればいいとこだし、国民年金なんかじゃ十四万だ。そこから生活費や老人になれば病院代もかかるだろうし、問題は定年が六十として、年金の貰えない五年間は最悪生活に二十万かかるから最低四千万は貯めないと」

「すごいな、もう定年のことまで考えてるのか」

「俺も会社が倒産するまではのんびり考えていたけど、でも無くなつて初めて、自分はこんなにもろい土台にいたことに気がついたって訳だから、いろいろ考えたよ」

僕は愕然とした。

目先の生活や日々を過ごすことに精一杯で、将来のことなど考える余裕もなかった。

いつかまた景気が回復し、貧しくとも就職できるだろうと言う幻想に支えられていたからだ。

樹海 8

だが、時代は良くても僕のようにまともにスキルのない、年齢の高い男にまともな職場は無かった。

何故スキルを磨かないのかと責められても、日々の仕事に満足していたし。

販売の資格などは取っても意味がなかったようだ。

預金も少ないし、安定した仕事もない。

僕には明日が見えないでいる。

「そこで投資じゃないか、ネットの引きこもりや学生が三億稼ぐ時代なんだから、おまえも少しやってみたらどうだ」

彼はそんな夢のような話を語り始めた。

主婦やただのフリーターがなんの学問もなくても、こつさえつかめば大金を手にできる。

インターネットと言う未知の世界は僕にも可能性を示してくれると言う。

「また、いろいろ教えてくれ」

だが、僕はまだそんな夢の話信じることは出来なかった。

書店時代の同僚はなんとか道を見つけたと言うのに、僕には道がない。

このままで僕はどうなるんだろうか、考えると不安で眠れない日々が続いた。

急場しのぎで本屋のアルバイトに応募した。

安い給料だったが、なんとか貯金と合わせると食えることはできるだろう。

もう一つ仕事をもたなければならないが、もつとちゃんとした仕事に着きたいので、そこは活動のために我慢した。

この仕事は安く雇用保険に入れたくないために、契約時間を制限していた。

残業はあっても手取り10万では家賃と光熱費にしかない。

それに国民年金や健康保険が僕の足かせとなった。

普通の正社員や親元にいるものならなんともないだろうが、収入の四分の一を取られては生活がなりたたない。

いつかは払えない日がくるなら、止めてしまった方がいいのでは
と言う思いもあった。

それに、生活保護の方が年金より高いのだ、今は払うことなく生活保護にたよるしかないだろう。

僕は鈴木と言うパソコンを入手しインターネットで世界がたとえもなく不条理なのを知った。

まじめに働いても、この先企業は正社員を雇う気などさらさらないのだと言うことも理解した。

生き延びるためには何でもしろと人は言うが、それが人生なら生きる意味はあるんだろうか？

戦時下なら理解できる。

しかし、今は平和で物が溢れて安全な世界だ。

ただ金がないからそれを眺めることしかできないが。

僕は書店や噂で知った知識から、株と言うものに可能性を感じた。

樹海9

そのころ、主婦が株で大もうけしたとか、普通の何の知識さえない人が、容易く大きな金を儲けていた。

いろんな本が書店にもならび、ブログやネットでもさも簡単かのように書いていたし、実際はじめて、

大金ではないがこつこつと、金儲けができた。

時給800円や900円と言う安い給金で働くよりはるかに効率がよく。

僕もこれでやっていけるかもしれないと一縷の望みを抱いた。

だが、世の中はそんなに甘くはない。

いきなりアメリカ経済が軋みはじめ、サブプライム問題と言う、僕からすれば何の関係もないことで、日々株価は暴落し

僕の貯金はあるという間に半分以下になった。

もともと僅かの貯金が一瞬でなくなったのだ。

僕はしばらくショックで立ち直れない日々を送った。

だが、食べるためには働かなくてはならない。

酒を飲んで紛らわせる金もない僕は、絶望という暗澹たる気分を味わい。

眠れない日々が続いた。

幸い家賃は調子の良かった時にまとめて払ったので、しばらくは暮らせるが、そのあとは野宿だろうか。

自業自得と人は言うだろうが、他にどうすれば良かったのか。

成功すれば努力は認められるが、成功しなければバカよばわりでしかない。

僕は賭けにまけたのだ。

そう自覚すると、少しだが、もうあとは死ぬだけなんだろうなと漠然と思った。

死ぬのが怖い？そんなことはない。

絶望の中で痛めつけられる方が怖かった。

いい年の男がどんなことをしても食べていける。

簡単に人は言うが、コネのスキルもない僕には雇ってくれる場所がない。

雇ってもらっても明日の保証はないのだ。

そんな人生にどんな展望があるのだろうか？

生きていく意味があるのだろうか。

僕は自分の苦痛を少しでも軽くできないかと、インターネットの情報の海の中を捜し始めた。

樹海 10

インターネットを解約する前に僕はネットの中に救いを求めた。だが、そこには全く理解しない者と、僕と同じ境遇の者が沢山いた。誰もかれもが、絶望の海の中で窒息しそうになっている。

僕はそして、「樹海へ行こう」のホームページに辿り着いた。

樹海とは株で失敗したら死ぬしかないと言うブラックジョークが株の掲示板では取り交わされているのだ。

同じ境遇の人を見つけ慰め合いたかったのかもしれない。

このままでは現実押しつぶされそうで、何かに救いが欲しかったのだ。

僕はそのホームページのチャットルームにログインした。

「おつ、新人さんだ」

「こんばんわW」

チャットルームとはインターネットで複数の人間が同時に会話できる部屋のようなものである。

「はじめまして」

さっそく声をかけてくれるので、僕も挨拶してみる。

もっと排他的な感じかと思ったがフレンドリーで、僕を暖かく迎えてくれた。

いつの間にか僕はここで自分の体験を吐露していた。

ネットなので相手の顔が見えないという気安さで、匿名性がいいことをいえた。

「俺はこの管理人です。なかなか樹海へは行けない根性なしなんで、まあぐちってるわけだけど」

とんさんと言うホームページの管理人も飾らない言葉で安心を与えてくれる。

ここには僕を見下げ馬鹿にする連中はいない。

中年で仕事も金もスキルもない人間をバカにはせず。

ぐちとしか思えない言葉にも優しく返してくれる。

こんな場所を僕は求めていた。

傷をなめ合っても仕方ないじゃないかと思われてもいい。

僕はここに自分がいてもいい場所を見附たのだ。

樹海 11

僕は樹海のメンバーが僕と同じ負け組だと思い、軽く見ていたのかもしれない。

だからこそ、人には言えない悩みを簡単に書き込めた。

「僕がバカだったのです。でも、それしか仕方なかった、いや思い浮かばなかったんです。

株で負け続けている時にはもう冷静に判断できず。あとから後悔するばかりで」

「金が余ってるやつの遊びなんだよね。冷静になれないから勝てない。追加資金もないし、デイトレは損きりするたびに金が減って行くし、儲かる奴が何人いるか、儲かってるってブログ自体あやしい」

株に詳しそうな人と言ふ管理人さんが書き込んで来た。

「そうですね」

もっともな意見に気持ちが悪くひこんだ。

簡単に儲けているような個人日記だが、本当に素人かどうか怪しい証券会社の宣伝かもしれない。

またはアフィリエイトのバーナーをクリックさせるためにいい加減なことを書いているのかも。

「景気のいい時は誰でも儲かる、でも悪くなればいつきだよ。その時に株を持ってる奴の負けだな」

誰かババをつかまされるのだ。

僕は何の仕組みも分かってないただの鴨もいいところだった。

あとからすれば、ああすればとか思っても、その時は頭が真っ白でどうも出来ない。

僕は破滅へ落ちていくのをどうすることもできなかった。

「まあ、今回は世界中が損してるんだから、まだましと思ったら」ソニアさんと言う常連の女性が声をかけてくれる。

「でも、首が回らないのは同じですよ」

「そうね、やり直しができればいいけれど、稼ぎ返すたって、仕事が無いものね。年齢ではじかれるし」

そうだ、またがんばればと言っても年齢による。

いい仕事など、はなからあきらめてはいるが、貯金など出来ない仕事しか僕らには回ってこない。

樹海 12

ソニアさん言葉に僕はほっとした。

彼女は分かってくれる。

「まあ、ここはみんな似たりよったりの、世間にはぐれたものばかりだから、説教はいいって、彼だけの責任じゃない。自己責任って言うけど個人にはどうしようもないこともあるよ」

他のメンバーもそう書き込んでくれた。

結局はみんなが世間の敗残者だと、僕は自分だけが駄目な人間ではないと思ひほっとした。

そして僕はここの常連となった。

甘い考えだと、もっと苦しい人間は、いるなどと説教するのは、大概自分は恵まれた立場にいる人間だ。

この情報のあふれた時代に、希望のない状況が、いかに人を痛めつけるか、裕福な人間は分からないだろう。

所詮当事者にしか分からない苦しみだ。

地獄のような心の苦しみは、眠りをさまたげ、自分の将来はないのだと責め続ける。

やり直しなんかきかない。どうせ苦しむなら死ななければと言う思いがぐるぐるする。

チャットでのひとときが慰めだった。

チャットで話すことによって、だんだんとみんなのことが分かった。

顔のない匿名の世界ではどんなつらいことも言える。

ソニアさん四十代の女性で、やむ終えない事情で、借りたローンが膨らみ、離婚し自己破産してスナック勤めをしているが、離婚し子供もいない自分の将来に絶望している。

いまさらやり直す希望も体力もない。そう言うが僕も同じだ。

希望がない毎日は神経を疲弊させ、絶望の未来しか予測できない

ようになる。

樹海 13

ナーガさんと言う人は、辛口のコメントをする人で、でもいろいろと知っているようだ。

三十代前半で、二年前就職難民だった彼は安定した職が欲しくて、ファミリーストランの系列に就職したが、

半年もしないうちに何故か店長の辞令をもらったらしい。

喜び勇んだ彼は懸命に働いた。

人員が足りない分は自分が寝る間も惜しんで働いた。

残業代が一切払われなくともがんばり、最後に倒れ入院し鬱病を併発し退職した。

名ばかり管理職と言う使い捨て社員だった。

二十代後半で病気持ちの彼の再就職への道は険しく、社会への不信感で立ち直れでいるようだ。

とんさんは僕と同じ三十代半ばのニートだ。

公務員になろうと試験を受けたが失敗し、三十代になって就職を探しているが、なかなかなく、

フリーターを続けたが、身体を壊し結局は親に今は世話になっていくらしい。

そのことがつらいが、まともな働き口はない。

親が死ぬ時が自分の最後だというのが口癖のようだ。

探せばいくらでも仕事はあるという、しかし半端な仕事をしていては、もっと年がいった時に、どうなるのか？

そんな生き方を選びたいものはいない。

がんばれば認められるなど妄想にすぎない。

甘えだというが、恣意的に企業が使い捨ての奴隷を求めているだけで

がんばれば認めてもらえるのは、運のいい人間だけだ。

今はマスコミや経営者は人は切り捨てるのが重要だと思っている。

こんな風潮では、正社員であっても安定雇用はない。

それなのに、経営者に近い位置のにいれば法外な金額のボーナスを約束される。

経営者側はたとえ過労死しようが、クビにされようが自己責任と言っただけからず。

自分の経営の責任は取らないのだ。

メンテナンスしないで使い続け、機械のように壊れれば捨てる。

何の人情もないこの世の中で、何を信じ、希望を持てばいいのか。

起業しろとか人は簡単に言うが、そんな才能が全ての人間にあると思っているのか。

世界を変えようとしても、僕たちの声は届かず、世界は一ミリも動かない。

そんな閉ざされた世界で、僕らにはネットしかなかった。

僕は食費を切り詰めてでも、インターネットを払い続けた。

食べたいと言う気持ちはとくに消えていたし、食べても味はなかった。

樹海 14

食べたいと言う気持ちはとっくに消えていたし、食べても味はなかった。

僕の働く書店は小さなチェーン店だったが、働きがいがあった。

店長は温厚で、店の雰囲気も悪くはない。

あとはただ、ちゃんとした保障や時間が長くなれば言うことはなかったのだが。

店長は僕のことを考えてくれているようで、前は残業させてくれたりするが、

昨今の事情から、それも減っている。

生きていくにはもっと働かなければならないが、時間の合う働き口がなかった。

「最近顔色悪いスよ、大丈夫ですか？」

同じ店で働く、若いバイトの石田くんが、心配そうに僕を見ている。自分では分かってなかったが、体重が減っているのだから見栄えが変わっているのだろう。

彼も就職浪人で、就職するまでと言うことで親のところから通っている。

今、働きざかりで経験を積むべき時を無駄に過ごさなければならぬ青年が増えている。

まだ、若いからじっくりと正社員をさがしていたら、待ち過ぎて、企業には欲しくない人材になる

氷河期の若者達だ。

企業は即戦力といいながら、自社で教育せず派遣社員を雇い。

社員には大学卒予定者を取る。

そんな企業の思惑で、彼もまた僕のように辛苦を味わうのだろうか、まだ若いのでそこまでリアルに考えてはいないようだ。

僕は人の心配などしているほどの資格はない人生の落伍者なので、

彼に何の言及も出来ないが、僕のようにならなければいいと思うだけだった。

睡眠不足と食事が食べれないことで、僕はさらに病を増長させていた。

しかし、病院に行く費用もない。

それくらいならインターネットの世界で、
僕の唯一の居場所にいたかった。

樹海 15

「顔色悪いけど、大丈夫？」

店の常連さんにも指定された。

高橋さんは僕と同年代の女性で、派手な顔立ちをしているが、看護師をしているまじめな人だ。

「大丈夫ですよ。高橋さんこそ、夜勤続きで大変じゃないですか？」
彼女は僕の体調の悪さもすぐに見抜けるのだろう。

彼女の職業柄なのかもしれないが、女性に優しい言葉をかけても
らえるのは嬉しい。

「まあ慣れたわよ、それよりお勧めないかな？」

「今日はいいい新刊がありますよ」

僕の勤める書店は、若者向けの小説やエンターテインメントを多く
取り扱っている。

彼女とは好きな作者が共通するので、暇な時間帯に来店した時は、
しばしば話すことがあった。

僕はもう本を買う金はないし、今の状態では本を読む気にもなれ
ない。

案内などをチェックすればある程度の内容がわかる。

この程度なら通常の対応ができる。

心は煉獄から逃れられない、だが無理矢理笑顔を作ってみせるこ
とができる。

「身体、大事にしてね」

高橋さんにそう言って貰うと少し心が、ほんわりとした。

こんな生活力もない男に優しくしてくれる女の人はいないのだか
ら。

「樹海へ行こう」のホームページに書き込むのは登録が必要なので、
めったに部外者はこないのだが、たまに心ない侵入者がいる。

「負け組どうしが、どうやっても現状なんか、変えられないんだよ。」

早く樹海へ行けよ。おまえら、努力もしないからだめなんだよ。早く死ねよ」

ひどい言葉が掲示板に書き込まれたり、チャットに乱入して来たりする。

こう言う奴は無視するが、それでも言葉を読めば痛い。

樹海 16

現実に痛めつけられていない者は、ただおもしろ半分やストレスのはけ口に書いているのだろうが、僕らの心からはそのたびに血が流れるのだ。

無視しても執拗に書き込みを繰り返す者は、管理人さんが排除してくれる。

痛い思いもするが、ここの住人になって今はもうここから離れられない。

僕の場合はここにしかないのだから。

破滅はだんだんと近づいている。

だが足下の深い淵を見る勇氣はまだなかった。

虚構と言われようと、甘いとあざ笑う連中がいようとかわまない。それに彼らだってこちら側に堕ちてこないとも限らない。

僕らはいろんなことを語りあった。

プライベートから政治のことやこの世界の暗さまで、何でも話すことが出来た。

彼らは、同じ傷のもの同士だからか、親身になって聞いてくれる。嘆きや悲しみを受け止めてくれた。

顔を見せないでいい分、惨めな自分を飾ることもなかったから喜楽にさらけ出せたのだ。

だがそれでも限界は来っていて、

僕には精神的な余裕も、経済的な余裕もなかった。

「そろそろ樹海へいきませんか？だんだん存在することに耐えられなくなってきました。オフ会もかねてってことで」

口火をきいたのはナーガさんだった。

僕は一も二もなくその提案に乗った。

「いいですね。僕もそろそろかと」

他のメンバーも声をあげた。

「私もお願いします」

「イザ！逝かん樹海へ！」

わいわいとにぎやかに常連のメンバーが参加を表明した。

常連以外はまだ切迫したものがなかったのだろう、一歩引いていた。

だが、それでいい、

まだ居ることがある者までがこちらに来ることはないのだから

樹海 17

チャットと掲示板のお知らせで、僕らの樹海逝き&オフ会が決まった。

参加者はナーガさん、ソニアさん、とんさんの他にネットカフェ難民のイサオさん

そしてまだ二十歳になったばかりのカオルさんだ。

年の若さに反対したが彼女の意志は曲げられなかったし、人間を使い捨てる社会にどんな未来があるのか？生きて行く価値や希望があるのだろうか？

希望のない未来を生きて行けと強いるのはただの偽善だろう。

苦しむだけ苦しんで生きて、さらに絶望を与えられるのは残酷だ。先の見えない破滅よりも、自分で幕を下ろした方がいいだろう。

みんなと約束して、もう後戻りはできない。

だが、僕は不思議と安らぎを感じた。

もう苦しむことはないんだ。

明日のことを思うことも、絶望も、僕という世間では不要な存在と共に消える。

この苦しみ多い世界は誰も僕らの存在を許してはくれなかった。

排除されるのみだ。

平凡な幸せなんか夢のまた夢、目が覚めれば冷たい現実しかない。

僕は部屋を整理してその日を待った。

連絡にいたので奮発して携帯を購入した。

僕にすれば大金だが、今はあとに残すものはないのだから。

後始末を頼むための大家への手紙にいくばくかお金を添えてテールに置くと、携帯と財布だけを持って家を後にした。

いままでにない爽快な生まれ変わったような気分で待ち合わせの場所へと向かった。

待ち合わせはファーストフードで、とんさんが樹海ツアーと書いた紙を持っている。

南の島を思わせる写真に樹海ツアーと書かれた紙は携帯に送られた画像で確認した。

その心配りがとんさんらしい。

まるで本物の楽しい旅行のような気分させてくれる。

どんな人達だろうと言う不安と期待を胸に店内に踏み込んだが、それらしい集団はいない。

僕は一瞬これがたちの悪い冗談で、からかわれていたらどうしようとうと不安にかられた。

樹海 18

だが、先ほども携帯で連絡したんだから大丈夫だろう。

店内の二階の窓際のカウンター席にこちらを見ている太めの男性がいた。

外見的特徴といい管理人のとなさんのような気がするのでよく見ると、

手には樹海ツアーと書かれた紙を持っている。

「あ、あの俺」

勇気を振り絞って声をかけるとその男性が先に自己紹介してくれた。

「ども、初めまして、俺が管理人のとんです」

男性は柔和な笑みを浮かべて僕を迎え入れてくれた。

ネットの上でも包み込むような優しいイメージだったがリアルでも、と

んさんはそんな感じの人だった。

「他の人はまだ来てないですか？」

となさんが窓際の席に座っていたので、まだ一人だと思っていたが、

となさんは窓際の席に座る人々の方を向き苦笑しつつ言った。

「いや、みんな来てるよ、僕が最初にここに陣取ったからこんな感じになったんだ」

そこには初対面だと言うのに、何か知ってるような顔ぶれが並んでいた。

窓際に並んでいるのは、ネットの上での付き合いであってリアルでつきあってないので

多少のてれくささがあっただろう、ネットでは何でも言っている、やはり初対面だから。

樹海へ行こう19話

みんなの秘密を知っている。

リアルに出会おうとチャットの向こう側のイメージとしっくりこなかったが

生身になれないだけで、会話をすればまた違うのだろうと
何げなく観察してしまった。

ソニアさんは風俗店で働いているはずなので、とびきり派手で肉感的な女性を想像していたが

そのイメージとは真逆で、痩せぎすでうつむき加減の地味な女性だった。

女性は化粧をすれば変わると言うけれど、それでもあまり派手にはならない感じがする。

それは彼女にまつわる、無気力で枯れたような感じからではないだろうか。

四十代だと言うのに、申し訳ないが六十はすぎた人のように見える。薄いメイクに痛みきった髪の毛にシワの多い顔は苦悶の影が見え隠れして

彼女を疲れきったように見せていた。

前に語った彼女の人生が彼女を追いつめているんだろう。

「世間は生きてれば何とかなるって言うけど、何にもならないんだよね。

道は閉ざされていて、良くなることなんかない。

悪くなって疲れだけが残って最後に死ぬだけなら、余計な苦勞を継続していくのが苦痛なんだよね。

私だって人並みの生活を送りたい。だんなが親戚にだまされて連帯保証人になったばかりに

大丈夫だからなってくれとか言った親戚なんかどっかに行方くらませてさ

私たちは自分のユメだった家売ったり、貯金や保険をおろしたり。それでも、まじめにがんばったのに、悪運って重なるんだよね子供がさ交通事故で死んじゃって

夫の心が折れちゃった。酒におぼれて、さらに借金まみれになって、仕方なく働きにでただけど

返せる額じゃなくなっていくから、ホステスから風俗にあつと言うまに堕ちたよ。

嫌だけど仕方ない旦那のためと思ってるのに、今度は旦那がそれをなじって暴力ふるわれて

なんで私はここにいて、こんなに辛い思いをしなきゃなんないんだろって、ばかばかしくなったの

自分達が苦勞して手に入れた幸せを、自分達のせいじゃないのに、簡単にとられて、風俗までして

子供はいなくなり、旦那も壊れてさ、守るもんなんてどこにもないのに、何してんのかな？って

この先ドラマみたいなすばらし幸せな展開なんかおこるはずもないんだから、辛いだけ無駄な気がするんだよね」

ソニアさんの語った過酷な過去が僕の脳裏によみがえった。

希望のない未来に何をささえに生きていけばいいのか？

人は簡単にそのうち何とかできると言うけど、それは所詮他人ごとで、本人にしかどうすることもできないし、また本人ですらどうもできないのだ。

ナーガさんだってそうだ。

本人がどれだけがんばっても、この世の中は運のいいものと悪いものの、要領のいいものと悪いものがいる。

優しい心だけでは生きてはいけないのだ。

皮肉でいつも粹な言い回しで僕らを笑わせるナーガさんだが。

実際は背の高いやせ形の暗い感じの男性だった。

僕はもっとちゃめつけのある人を想像してたのだが、そんなものだ

ろう

ネットでは誰しもある程度の仮面をかぶっているのかもしれない。
ナーガさんはこの先に絶望した人だ。

男性の就職は20代できめないとあとはろくなところがないそうだ。
日本が新卒か即戦力主義と言うくだらない主義にはまっているから
中途半端な人間の行き場は

その日ぐらしの不安定な職しかないのが現状だろう。

彼は内定していた会社が赤字のために内定を取り消され、そのあと
入った企業がブラック企業だった。

名ばかりの管理職に拔擢されはりきったのはいいものの、待遇は普
通の社員以下だった。

残業は百時間を越えても払って貰えない。

悪くすれば泊まりもあったが、給与は社員に管理職名目の1万だけ
で、日曜出勤もざらだった。

上司からのパワハラを毎日のようにうけ、だんだんと自分がおかし
くなっているのに気がつかないで

最後に過労で倒れて入院し、そのためにムリヤリ退職に追い込まれ
た。

当時は自分は上司の言う通りの仕事のできない人間だと思っていた
らしい。

しかし、だんだんと会社のやりくちが世間でも批判されるようにな
ると、それがその企業の安い人件費で人間を使う方法であったのだ
と気がついたのだ。

裁判をしようにも、何年もたったあとだったし、彼は今も鬱病にか
かり、身体も心疾患にかかってしまったために、戦う気力さえない
状態だ。

それに、彼の会社だけがそうなら納得はできるが、今の日本はどこ
もにたりよったりで、彼のような中途半端な年齢で持病持ちを雇う
会社はない。

今はつなぎのフリーターをやっているが、どうなるか考えると夜も

眠れないようだ。

資格を取っても、経験がなければだめだと言う。

育てる気のまったくない企業ばかりで、彼は未来に希望を持ってないでいる。

もう未来はとざされているのが、今の若者の現状だろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8096f/>

樹海へ行こう

2011年10月4日23時53分発行